

クリティカルパスは導入しやすい整形外科の診療から

整形外科診療, 殊に手術的治療においては, クリティカルパスがもっとも導入しやすいと言われる。また, 大学病院を中心とした特定機能病院における包括評価支払い制度 (DPC) はこの春から始まっており, 医療の効率化のためには, こうした手段の活用なしにはなし得ないと言われる。クリティカルパスの活用には, なお問題点を含んでいるとはいえ, 絶えず現場を中心に改変し, より良いツールとして育てあげていく努力も問われている。

本書の編者である佛淵, 野村, 千田の三氏は整形外科医療の現場でもっとも早く, また多くの臨床例からパスを実践し, 十分にその意義と展望を熟知しておられる方々であるので, 本書の解説によって個々の現場でその利点を運用していただきたい。

われわれの施設でも, 1988 年頃よりクリティカルパスを導入しているが, 本書に書かれている通り, ① 臨床アウトカム, ② 満足度, ③ 在院日数, ④ 財政のアウトカムと, 医療の総合的な取り組みに改革をもたらしている。このなかでも ② の満足度の充実がもっとも顕著と考えている。特に医療従事者ばかりでなく, 患者や家族の方々と医療の内容, 作業から退院に至るすべてをよく理解していただき, 十分なインフォームド・コンセントのうえに安心した医療を提供していく喜びをすべての人が共有している充実感, これまでに考えられなかった一つの医療革新と言ってもよい。また, 卒前・卒後の教育上もクリティカルパスは優れた威力を発揮する。一つひと

つの医療行為ばかりでなく, 治療の過程で起こってくるさまざまなバリエーションも, 医療サイドの技術ばかりでなく患者サイドの変化を具体的に呈示してくれ, こうしたことにに対する対応も適宜かつ正確に行えるようになってくる。

最近では医療の対費用効果が喧しく言われるが, 確かにこれまでやってきた医療現場の無駄を分析し, より確かで効率的医療を開発していくうえでも, 本法の導入は欠かすことができない。どの病院においても, 制度, 人事, 財務システムの改変が急ピッチで進められつつある。しかし, 医療の現場では「安心して満足のいく医療」を期待される。これには医療が絶えずその品質を管理し向上させ, なおかつ効率的な医療を実践していくことであることは言うまでもない。クリティカルパスは工業や経営工学のなかから育ってきた手法とはいえ, われわれは限られた財源のなかで, 絶えず良質の医療提供者として, 国民の皆さんから信頼され, またすべての医療も情報開示されていくものである。したがって, 職業人としてのわれわれの医療行為も絶えず評価され, それが制度のうえで生かされてくるようであればならない。こうした点からみても, クリティカルパスの導入は, 21 世紀における円滑なシステム改変をもたらしてくれるように思われる。

われわれのクリティカルパスを用いた整形外科診療を通して, 全診療科への取り込みの弾みとしたいものである。このことは必ずや近未来の明るい医療発展をもたらすものと言える。

(A4 頁 194 3,570 円 (本体 3,400 円 + 税 5%) 2003 医学書院 刊)